一写一筆

～静岡の今

「お茶の都」世界に発信

八十八夜を過ぎると、静岡は一番茶の茶摘みが始まる。

茶摘みといっても、最近はほとんど規格化された畝(うね)の新芽を、摘採機がバリカンのように刈り取っていく。五月晴れの富士を背に、そろいの衣装にたすき掛けの茶娘たちが手際よく摘んでいく日本の原風景を見ることは少なくなった。

お茶は長年、静岡の代名詞みたいになってきたが、業界は生産高の減少や茶価の低迷にあえいで久しい。荒茶生産高は全国シェアの約40％を占めてトップだが、20年前の80％弱に減少。平地の集約栽培を進めてシェアを約30％まで伸ばしてきた鹿児島県に追い上げられている。

「お茶の静岡」めざして、業界の懸命の取り組みは続く。山間部の茶畑を集約し、小規模農家を大規模経営体に再編する構造改革が進められている。インターネットによる販路の拡大や海外進出なども模索中だ。

一筋の光明もある。世界的な健康志向の高まりや日本食ブームを背景に、海外の緑茶需要は増加している。県は「島田市お茶の郷」を県営化し、「茶の都しずおか」の拠点にしようとしている。展示、体験、学習、にぎわいの機能を持った施設として、茶文化を世界に発信していくという。

藤枝市岡部町に良質の茶生産地として知られる「玉露の里」がある。そこに、ハンセン病で失明した俳人・村越化石の句碑がある。

望郷の　目覚む八十八夜かな

発病前の化石の故郷は、のどかな茶畑が広がっていた。少年の見た「茜(あかね)たすきに菅の笠」姿の茶娘に代わって、今は摘採機がエンジン音を響かせている。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

茶畑の管理――安倍川の支流、足久保川に沿った一帯は、聖一国師が中国からお茶を持ち帰り育てた静岡茶の発祥地とされている＝静岡市葵区で、全日写連の山田康さん撮影